

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』報告 ——エジプト・カイロ大学、アラビア語——

報告者：平松亜衣子（連環地域論講座）

平成20年2月6日～4月12日

はじめに

筆者は、『若手研究者インターナショナルトレーニング・プログラム (ITP)』の初年度の派遣生の一人として、エジプトに派遣された。今回、私が習得する言語はアラビア語である。アラビア語には、標準アラビア語（フスハー）と各地域で実際に話されている方言（アンミーヤ）が存在する。現在のアラブ世界において、新聞やテレビ、出版物などメディアで使用されているのは標準アラビア語である。そこで、今回の派遣では標準アラビア語を学ぶことにした。

初年度の派遣ということで、今後派遣される学生のことを考え、語学の研修先からカイロでの生活のノウハウなどをすべて開拓してくるつもりで現地入りした。（余談であるが、結果的には行き当たりばったりでトラブル続きのカイロ生活となってしまった。）この報告書では、今後 ITP への派遣に応募しようとしている人、地域研究をするにあたって現地語習得が不可欠な人のために、少しでも有益な情報が提示できれば幸いである。

語学研修について

私は、湾岸産油国のひとつであるクウェート国における、民主化とイスラームの関係について研究している。そこで、アラビア語文献および現地でのフィールドワークの重要性から、アラビア語を学ぶ必要があった。大学院への進学が決まってからアラビア語との格闘を始めた私にとって、今回 ITP の派遣生として現地でアラビア語を学べたことはとても幸運であった。

語学研修の提携校はカイロ大学であるが、カイロ大学には ITP プログラムのニーズに対応できるような授業が用意されていないため、カイロ市にある語学学校「アル・ディーワーン」で語学研修を行った。カイロ市内にある語学学校はどこもそうであるが、フスハー、アンミーヤ、会話、文法など、生徒の様々なニーズに対応できるようになっている。ITP から派遣される生徒は、自己の研究に役立つ実践的な言語研修を望んでいる。私の場合、クウェートの民主化についてのアラビア語文献を読みたい、という要望を満たしてくれる学校で研修をする必要があった。「アル・ディーワーン」校では、そのような特別なニーズに対応するための特別コースも提供しているため、派遣先としては最適であった。

ところが問題は、私のアラビア語レベルが学術書を自由自在に読みこなせるほどのレベルに達していないことであった。もちろん、そのような語学力があるのであれば、そもそも語学研修に行く必要はない。しかし、正直に言えば、学術書を読むにはあまりにも語学力が足りないレベルであった。その場合どういった問題が生じるのかというと、語学学校側は、段階的に文法事項の確認や基礎語彙力の強化から始めようとする。おそらく、それは他の語学学校に行っても同じだったであろう。しかし、派遣期間には限りがある。そこで何とか、自己の研究のために即効性のある授業方法を提示し、苦戦しながらも

学校側を説得した。

授業時間は、1対1で週に5日、3時間ずつというペースで行った。授業数も、必要に応じて各自決めることができる。1日3時間というと少ないと感じるかもしれないが、その日の予習復習などを考えると、決して楽ではないというのが私の実感である。

現地で語学を学ぶことの魅力とは

ITPの最大の魅力とは、現地で語学を学ぶことである。現地で覚えた単語の吸収力は、日本にいるときよりも数倍高まっているように思われる。現地では、アパートから一步出ればアラビア語の世界が広がっている。何をするにもアラビア語が必要である。そこは、まさに学校で覚えた単語の実践の場として最適である。それは、日常会話であれ専門的な用語であれ同じことである。テレビをつければ、私の研究分野である政治用語が頻繁に聞こえてくる。

また、同じアラブ人でありながらクウェート人とは違った視点を持つエジプト人と、クウェートの政治について議論する機会を多く得ることができた。はじめ、私が「クウェートの民主主義についての本を読みたい。」と言うと、語学学校の担任教師は、「クウェートの民主主義ねえ。」と、無関心かむしろ面白くないといった反応を示した。実際に、「私には無理。」と言って断られそうになったほどである。しかし、一度授業が始まると非常にクウェート政治の文献に興味を示され、私よりも熱心なのではないかと思うほどに真剣に指導してくれた。また、授業が終わってから次の生徒が来るまでの間、「さっきの本について話しましょう。」と言い、「私はこう思うのだけれど、あなたの意見はどうか。」と真剣な議論をしたこともあった。(もちろん、基本的にアラビア語を使用しながらである。)このような体験ができるのは、ITPならではの魅力であろう。

語学研修を通じた現地での体験

今回の語学研修では、アラビア語の学習のみならず、もしかするとそれ以上に重要なことを学んだのではないかと感じている。アラブ世界に限ったことではないが、現地の事情に通じていない外国人に高額な金銭を要求する、といった金銭トラブルはよく起こることである。私もその例に漏れることなく、現地で金銭トラブルを起こしてしまった。その時、指導教官である小杉先生および、現地でトラブル解決に尽力してくださったサイエド氏から教わったことがある。このような金銭トラブルは、法律に違反する「犯罪」でもなければ、合法的に人を騙す「詐欺」でもない。エジプト(およびアラブ世界)では、金銭を払った時点で、「合意(イッティファークという)」が成立したとみなされるのだという。「なるほど、これも地域の論理なのか。」と知ったとき、トラブルが研究対象地域に関する興味深いエピソードとなった。同時に、地域研究を学ぶ者として、単に被害者意識だけで終わらせるのではなく、真摯に向き合うべき出来事であったと感じている。今回の研修で、現地の論理が分かったなどとは到底言えないが、現地に行くと、まるで子どものようにわからないことだらけであることは実感した。

現地に行くと、自分の中の普段とは違った一面が顔を出す。しかし同時に、フィールドワークは自分の性格を反映した形でしかできないものだ、という友人の言葉を思い出さずにはいられなかった。金銭トラブルひとつとっても、日本にいるときと同じような失敗を犯した。ITPは、現地語習得の機会としても最適であるが、同時にフィールドワークという側面も持ち合わせている。今後派遣される学生が現地でのどのような収穫を得て帰国するのか、非常に楽しみである。